

シンポジウム1

育児支援ネットワークの構築に向けて

子育て支援に共感体制を！

福元 小百合 (NPO法人ミーサ・インフォメーション・Net)

1. はじめに

情報化社会の中で子育てに関する情報は氾濫している。しかし、地域の閉鎖的な生活環境が子育てにも大きく影響し、保護者同士による生の情報が届きにくい状況にある。そのため、現在多くの保護者は一般的な子育て情報に頼らざるを得ず、自分の子どもの成長に幅を持たせる事が出来ない。その中で、育児不安を強めた母親が育児ノイローゼに陥ったり思い余って虐待をしてしまったりという社会問題がクローズアップされる中、7~8年前より子育て支援として一番に注目を集めたのが「育児サークル」であった。母親同士が育児不安を出し合い、共感し合う事で子育ての孤独感を和らげたり、小さな子どもを抱えての不自由な生活を少しでも楽しめるようにと母親同士が集まって活動するものである。そしてこの「育児サークル」の出現によりたくさんの母親が閉鎖的な子育て環境から抜け出すことができ、子育て中の母親の共感体制は整ったかに見えた。しかし、ここ数年、育児サークルの活動を見ていると、育児サークルはほとんどの場合、参加者と同年代の子どもを育てている子育て中の母親が運営者であるため、少しずつ運営に負担がかからないようにと形をかえた結果、サークルの目的が思いを共感する場から楽しむ場としてのウエイトが大きくなってきた。そこで思いを「共感」するためだけの場所が必要になってきたのだ。当団体はその場所として、平成14年4月より「子育てサロン」という形で共感できる環境作りを行って

る。今回は、その「子育てサロン」というフリースタイルの母親間の交流の場が、いかに共感体制をつくる上で必要なのかを強く感じたので、ここに報告する。

2. 鹿児島県の現状

私は両親の離婚により父方に引き取られたため、思春期以降母親不在の中で、日常生活に必要な母親の役割を受け継がないまま結婚し子どもを産んだ。また、母親と一緒に生活をしていた時でも、大変ヒステリックな母親だったので、常にこんな母親にだけはならないと子ども心にならずに思っていた。しかし、いざ自分が母親になり子育てをしてみると、自分にストレスがかかった時、やはり子ども心に嫌だと思っていた事を自分の子どもにしてしまう。それで、私は母親失格だと悩む。でも、それ以外に受け継いだものもないのでどうしていいか分からずに、当時は何をしても子育てに自信が持てず常に不安だった。そんな中、母親同士の交流の場で、悩んでいるのは自分だけではないと知った。また母親からしっかり愛情をもらっているはずの友達もやはり同じような悩みを持っていると知った時、過去に捕らわれる事なく、ただただ自分なりの子育てを探せばいいという事に気が付いた。そこから、子育てが急に楽になり、忘れていたが、私の母から向けられた私への温かいまなざしも思い出す事ができた。そして私は大きな育児不安から抜け出せたように思う。

それから後、このボランティア団体を結成し活動していく中で、子育てに悩んでいるお母さ

ん方に対しても同じように共感すると、不思議なくらい自分を取り戻し、しっかり自分なりの子育てを探し始めるのを見て、一番最初に取り組んだのが、当時、共感出来る場所として作られ始めた「育児サークル」の紹介だった。しかしここ最近、育児サークルも沢山出来ているにも関わらず、「私達の活動の中で」接するお母さん方は、このサークルでは共感できないという。それはなぜなのだろうか。

そこで、私たちは鹿児島の子育ての現状把握のために、鹿児島県下の小児科開業医院および総合病院小児科外来を受診された保護者の方を対象に、それぞれの病院の先生方をはじめスタッフの方々のご協力を頂き、保護者自記式による無記名のアンケート調査を実施した。その中で、例えば、父親の育児参加の割合とその状況に対しての母親の満足度の割合であるが、今

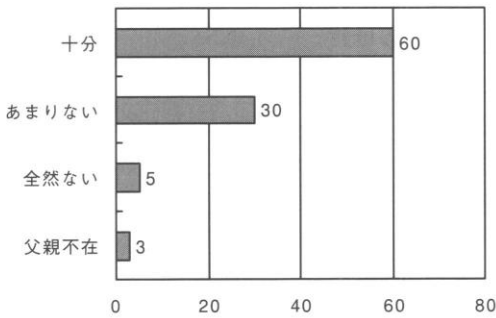


図1 父親の育児参加

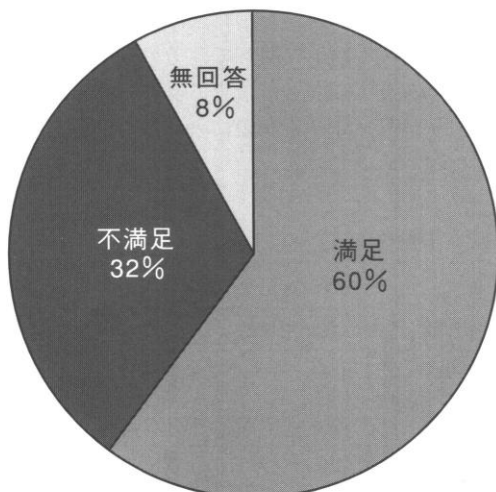


図2 母親の満足度

回のアンケートの結果(図1・図2)では、6割の父親は育児に積極的に参加しており、その状況に6割近い母親が満足している。そんな中、父親の育児参加に不満を持っている母親が共感を得たいと考え育児サークルに参加したとして、単純に10人のうち6人が満足しているグループの中でうまく共感が得られるだろうか？そこで必要なのが、共感を必要としている母親に、共感できる相手をコーディネートする事だと考えた。そこで、私たちが力を入れたのが「子育てサロン」だった。

「共感」が大事だというのは随分前から言われていることなのに、この鹿児島ではこの体制が今の子育て支援にないに等しいのだ。

3. 共感できる環境作りの実際

私たちが行っている「子育てサロン」は公園の室内版で、サロン開催中は何時に来てても何時に帰ってもかまわない。そして、母親が心身共にリラックスする事が目的なので、親子遊びのようなイベントを一切せずお茶を飲みながらおしゃべりをする(資料1)。また、その間子どもたちは間仕切りのない隣の部屋で、子どもと遊ぶ事を中心にお願いしたボランティアスタッフに遊んでもらう(資料2)。子どもたちも完全託児ではなく母親の顔が見える所で遊べるので、比較的安定して好きな遊びが出来ているようだ。ただ、このような集団にすぐ馴染めない子どももいるので、その時は母親も一緒に子どもたちが遊ぶスペースで過ごすのだが、ここにも同じように離れられない親子が遊んでいるので、母親同士が子どもを見ながらおしゃべりをしたりして交流の場になっている。その中で、



資料1



資料2

私たちは、母親の日常会話に触れながら、共感できる相手のコーディネーターが必要な母親には適宜、同じような環境にある人やその悩みを越えた人などを状況に応じて紹介している。また、先輩の母親としての立場で子育てのアドバイスが出来る私たちサロン運営者と、参加者と同じ年代の乳幼児を子育て中で今の子育ての悩みを共感できる協力スタッフが、ここでは何でも話していいんだという雰囲気作りを行い、その中で共感を得られる環境を作っていく。そして、初めての参加で輪に入れない母親には、子どもの年齢が近いか近所の方を紹介し友達作りのお手伝いをしたり、育児不安の強そうな母親には、運営者がしっかり話を聞き適宜アドバイスをしたり、必要時には専門の育児相談窓口を紹介する。お茶を飲みながらリラックスした雰囲気の中でとにかく一人で抱え込まないように伝えている。また、サロン運営者が子育て支援者であるため、母親が継続的に参加する事により、子どもの成長を一緒に見守る事ができ、その子が成長の過程で何かつまづいた時、母親と一緒に考えてあげられる第三者になれる。このように母親同士の共感体制をベースとした自助グルー

プに近い形で子育て支援を展開している。現在まで述べの参加者は250名を超え、入会制・申し込み制ではないので当日にならないとその日の参加者数は分からないが、大体1回のサロンで15~20名の参加があり参加者より1回200円の参加費を頂いている。現在ではそれでお茶菓子代とボランティアさんへの交通費をまかない、残りで子どもたちのネームや子ども用の割れないコップ・おもちゃなどを少しずつ揃えられるようになった。

4. 子育てサロンと育児サークルの違い

私たちは必ずしも育児サークルが母親同士の共感に繋がらないと言っている訳ではなく、勿論サークルでも共感を得られる母親もたくさんいるので、母親自身が共感を得られる場所の選択肢を増やす意味で私たちが考えるサロンとサークルの違いを簡単に表1に紹介する。

5. 今後の展開

私たちはこの活動を通して、頻繁に来てくれる親子との信頼関係を築いていく中で、療育の早期発見に繋がるのではないかと親子との関わりもあった。

このような形の子育てサロンがこの鹿児島でも各地域に広まり、このような形での近所のおばさんの存在の子育て支援者が身近にいる事が共感し合える環境作りには必要である。そして今後は、地域で行われている様々な子育て支援団体や行政との連携を密に図り、特に支援が必要と思われる親子に関して、その親子の現状把握とその現状に応じた子育て支援を行うためのネットワーク作りを念頭に入れ日々活動していきたいと考えている。

表1 サロンとサークルの違い

	子育てサロン	育児サークル
運営者	子育て支援者	子育て中の母親が主体的に行っている所が多い。
形態	グループに所属せず、決まった日時の中で自由に参加できる。 出欠確認は不要。	グループに所属。基本的に参加時は決まった時に集合。 大体のメンバーの出欠確認が必要。
内容	母親自身が心身共にリラックスする事が主な目的。 ゆっくりお茶を飲みながら、おしゃべりや情報交換を行う。	親子で楽しむ事が主な目的。グループにより活動内容は様々であるが、おしゃべりや情報交換の他、親子で楽しめるイベント的活動を行う。